
秋桜の花

健史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋桜の花

【Nコード】

N4511D

【作者名】

健史

【あらすじ】

雄太は高校3年の時に母親をなくし卒業後、東京のカメラの専門学校へ通う為一人暮らしを始める。東京での生活の中で恋愛・友情・そして知られざる過去が・・・あたたかなラブストーリーです

弥生との出会い

1

深夜の11時をまわっていた頃だったと思う。

電話が鳴り僕は受話器を取った。

「もしもし。」

「成瀬さんのお宅で宜しいですか？」

「はい。そうですが」

受話器を通して相手の男は淡々と話す、その内容はこんな事だ。

2

電話を掛けてきたのは、東京の警察からで、母親が事故に遭い病院へ運ばれたのだが、即死だったと言う事と、母親の引取りと遺品の確認の電話だった。

僕は朝一番の新幹線に乗り、母親の居る病院へ向かった。

僕の家は母子家庭で小学校に入学して暫くしてから父親は癌で亡くなった。

母親は一人で僕を高校3年生になるまで育ててくれた。

しかし、その母親もこの世界から居なくなり、僕一人になった事

になる。

東京の病院に着いた僕は、警察の人に案内をしてもらい、魂が抜けて、肉体だけの残った母親に会う事になった。

本当なら、凄く悲しくなり涙が溢れるのだけど、そんな事も忘れてしまう事実をめのあたりにするのだ。

そもそも母親が東京に行っていた事も僕は知らなかったのだけど、それよりも、母親が一人で死んだのではなく、

隣にもう一人母親と同年代の男が同じように死んでいた。

警察の人は事故に遭った時二人は一緒の車に乗っていて男が僕の母親を庇う様にして死んでいたと言っていた。

事故の経緯はこうだ、二人は首都高速中央環状線で走行中渋谷区の辺りでかなりのスピードを出していた為ハンドルのミスで横転してしまっただけ、辺りは車も疎らでたまたま、別の車両との追突はなかったと言っていた。

なぜ母親がそんな時間に、この男性といたのかは分からないけど何となく二人の関係が友達とかそんな関係ではなくもっと別な関係だったのだと思った。

警察に、遺品の確認をと言われ、僕は別の部屋へと移動した。

母親の遺品と言われて受け取った物は、高価なネックレスや、ブランド物のバックだった。

いままで少し不思議だと感じていた事はある、女手一つで育てくれた母は、生活の事では余り愚痴をこぼした事が無い。

それどころか、周りの友達と同じようにそれなりに僕に買い与えてくれていたからだ。

本当なら家計のやりくりでもっと大変なはずだと思うのだけど、僕自身余り気に留めていなかったので今思うと不思議な事だと思う。

遺品を受け取った後、暫くその部屋に居ると、知らない僕と同じ年くらいの女の子が入ってきた。

その子は泣き止んだばかりだったのか少し瞳が赤くなっていて、時々鼻を吸ったような音をさせていた。

多分母親の隣に居た男の娘だろうと僕は思い何となくこの場に居にくくなり部屋を出る事にした。

色々な手続きや書類を書き終えた僕は、病院から家に帰る事にした。

その途中廊下ですれ違った看護婦の話が僕の耳に飛び込んできて、多分母親と男の話だろう不倫がどのとか言う話をしていた。

母親の死体は、直接葬儀場の方に行く事になっていたので、僕はそのまま自分の自宅へ帰る事にした。

元々親戚が少ない為、そんな集まらず小さな葬儀になったが、少なからず何人かの人たちは別れを惜しんでくれていた。

母親の葬儀も無事終わり、僕は少しの間、母親の親つまり爺ちゃんと婆ちゃんの家から学校に通う事になった。

僕の住んでた町からそれ程離れてはいなかった為、学校も電車を通う事になったが、前より少し時間が掛かるくらいでそれ程気にならなかった。
そして無事に高校を卒業する事ができた。

2

あれから1年たった、現在の僕はと言うと東京のカメラの専門学校に通っている。

生まれ育った故郷を離れ一人暮らしをしながら、学校に通うことにした。

祖母からの仕送りと週3〜4回ほどコンビニでアルバイトこれで僕は毎月の生活を送っている。

僕はカメラに興味を持っていて、中学校に入学する時、お祝いに母親に買ってもらった、一眼レフのカメラをずっと愛用していたのだ。

一人を出掛けて風景や花とか夜景の撮影をして家で現像までこなしていてその頃から密かに将来はカメラで食べていけたら何て夢を持っていた。

趣味で始めたカメラの撮影も今では、カメラの奥の深い魅力に取り付かれた一人だ。

写真科の2年制度の学校に入学した僕は、学校での授業も楽しくそれなりに学生生活を送っている。

友達も数人ほただけど、気のあう仲間がいる。

その仲間の中の一人吉田和夫彼は、合コンが大好きらしくこの学生生活の大半を遊んで暮らしているような奴だ。

体はガッチリしていて身長も180cm位あり髪型は短髪で茶色、顔は普通と言ったところだろう。

彼は元々この町が地元らしく昔からの友達と夜の街へと毎週のように繰り出しているらしい。

僕はと言うと昔からそういう事には余り積極的になれず、誘われても断っていた。

女性に興味がない訳では無いけど、多分一般的に言う奥手だからだろう。

しかし、和夫に突然頼まれる事になる。

「雄太。今日の夜暇だよな？」 成瀬雄太僕の名前だ。

「今日の夜？別に予定はないけど。」

今日はバイトも入っていなかったし、普段から他に用事と言うものは余りない。

「じゃーきまりな！新宿駅の東口に19時に待ち合わせで」と言っ

て軽く右手を振って歩いて行った。

確かに予定はないとは言ったけど、行くとか行かないとか言う前に話が済んでしまい僕は仕方なく待ち合わせをした場所に行く事になった。

19時より少し前に駅に着いた僕は、和夫が来るのを待つ事にした。

新宿駅は色々な人たちで賑わいを見せていた。

仕事の帰りのサラリーマンやOL、学生らしき人も多数・・・

その人の流れを僕は知らずに目で追ってしまっていた。

すると、後ろから僕の肩を軽く叩き、

「待たせたな。」と和夫が言ってきた。

僕が振り返ると、和夫ともう一人地元の友達らしき人が居た。

「こいつ俺のダチの慎也って言うんだ。」と和夫が紹介すると、

慎也が「よろしく」と軽めに挨拶をしてきた。

僕は「うん。よろしく」と言い返す。

慎也は、ラインストーンとラメでアレンジしたTシャツにブルーのデニムといったおしゃれな服を着ていて一般的にいうイケメンだ。

彼もまた身長が高くモデルにでもなれそうな奴だった。

ハッキリ言つて僕とは全く別の人種のように思える。

二人に連れられて僕は洋風の居酒屋に入る事になった。

居酒屋に入ると和夫が店員にあらかじめ予約をしていたのだろう、席に案内されそこに座る事になった。

「なんだよ、まだ来てないじゃん。」和夫は近くにあつた灰皿を自分の所に寄せて、タバコに火を点けた。

「誰かと待ち合わせでも、してるの？」と僕が聞くと

「合コンって言わなかった？」と前もって言っていたかのように答えた。

何となく察しはついていたけれど僕は余りそうゆう場は好きではない少し不機嫌な顔をする、

「突然決つて他に空いてる奴いなかったんだよ。先に言つとお前断るから・・・ごめん」と言つて両手を合わせて誤つてきた。

確かにその通りだ、しかし今更帰るわけにもいかず僕は仕方なく承諾することになった。

3

暫くして3人の女の子が僕達の席に向かって歩いて来た。

「こんばんは、待たせちゃいました？」

ニコニコと笑顔で話しかけてきたのが佐々木梓、今回合コンの話を持ちかけてきた女の子のようだ。

彼女は少し茶色のかかったセミロングにくるりとカールをかけた髪型で花柄のブラウスにデニムといった格好をしていて、キリッとした顔立ちのどちらかと言うと美人で色白の大人びた女性だ。

和夫と慎也は何度か会っているような口ぶりで、

「待ったよ。すかしくらったと思ったぜ。」と言って親しげに話をしている。

「始めまして。」と言って他の2人も椅子に腰掛けてきた。

僕はどうしていいのか分からなくなり、和夫の方に目をやった。

和夫はそれに気がつき、まずは飲み物決めようぜと言って僕の方と彼女達にスツとメニューを差し出す。

僕はアルコールは余り飲める方じゃないのだけど、こんな時くらいはと思い梅酒ソーダーを頼んだ。

そして、それぞれに飲み物が届いた後、慎也が乾杯の音頭をとり合コンが始まった。

まず最初は和夫が女の子達に僕と慎也を紹介してその後、梓が2人の友達の紹介する。

2人の名前は沙織と有紀と言っていた。

僕からテーブル挟んで正面が梓左に有紀そして沙織の順番に座っていた。

因みに僕の隣は和夫そして慎也だ。

彼女達はみんな同じ短大に通っているらしい。

僕はどんな話をして良いのか分からず和夫と慎也が彼女達と話をしているのを聞いているしかなかった。

そこへ梓が僕に話しかけてきた。

「余り話さないよね？」

「え？うん。」と言って言葉を詰まらせた。

すると横から和夫が「雄太は合コンとか苦手なんだよ。誘っても断るし今回が始めてなんだぜ。珍しくねえ？」

「えゝそうなの？」と言って梓は僕を見た。

確かに珍しい事なんだと思う、大抵は高校時代からみんな普通にしている事だと思うけど僕にはそんな経験もない。

「うん。どうも苦手で・・・」と言って苦笑いをしてしまった。

僕は時々会話に入っているふうに見せながらも、周りの僕達以外の店に居る人を見ていた。

大きな声で笑って楽しんでいる人、サラリーマンの上司と部下の会社の愚痴だろう人間観察の方が僕は合コンより魅力的だった。

合コンが始まってから、数時間程過ぎて、

僕はお酒がほとんど進まず始めに頼んだ梅酒ソーダーの後にジントニックを追加したけど、余り減らずに残っている。

周りのみんなは、結構な量を飲んでいる風でテンションはかなり上がっていた。

「この後、何処行こうか！」慎也が楽しそうに声を張り上げて言う。

「カラオケ行こう！カラオケ！」有紀がそれに続いて言う。

時間は10時を少し過ぎたくらいだ。

精算を済ました後、店を出た僕達は外で少し立ち話をしていた。

その間に和夫と慎也は有紀と沙織のメールアドレスと番号を聞いているみたいだった。

僕はそんな気になれずにそのやり取りを見ているだけだ。

その後、悪い気はしたのだけどみんなに謝ってから僕だけ帰る事にした。

家に着いて時計を確認した頃には11時30分になっていた。

僕は軽くシャワーを浴びてから、数週間前に撮影した写真の現像

に取り掛かる事にした。

僕の家は2DKで6畳の部屋と4畳の部屋がある、その4畳の部屋を少し改造して暗室にしている。

カラーの現像は温度調整や機材の値段を考えると諦めるしかなく、白黒現像だけ自分でやる事になっている。

僕はまだフィルムの現像をやっていなかった為、ステンレスタンクにフィルムを巻きつける所から始める。

その後、現像液と定着液をメスカップに移し温度調整をおこなうなど全ての工程が終わりフィルムにクリップを取り付け乾燥するのを待つ事にしたのだが、時間は1時を過ぎていたので今日のところは寝る事にした。

4

次の日に学校に着いた僕は、席につき教室の窓から空を眺めていた。

空はぐずついた天候で今にも雨が降りそうだしそうだった。

そこへ和夫が僕に声をかけてきた。

「おはよう。昨日は悪かったな。」少し申し訳なさそうに言ってきた。

「うん。おはよう。先に帰ったりしてごめん。」かえって僕のほうが先に帰ってしまったのだから誤らなくてはならないと思っていた。

「いいよ。俺が誘ったんだし、雄太がいなかったら人数足りなかったから助かったよ。」

和夫は強引な所もあるけど、結構気を使ってくれるいい奴だ。

「カラオケ行つた後、梓にお前の連絡先聞かれたから教えといたぜ。」

「ん？僕の？」

「おう。お前のだよ。」

「何で？」

「何でって知るかよ。聞かれたから教えたただだよ。案外お前の事にいったのかもよ。」

和夫はそう言つて僕の顔を見てニヤツとした後、自分の席に戻つて行つた。

そんな筈はないと思う何故なら昨日彼女と何の話をした？と聞かれたら二言三言話した。

としか言えないし、

どんな子だったと聞かれても（？）のマークしかでてこない訳で・

・

彼女が僕の連絡先を聞いてきたのも不思議な事だと思う。

写真とCGを融合したデジタル画像処理の学習を終えて帰る頃には雨が降っていた。

もうすぐ、梅雨の時期を迎えようとしている。

こんな時期に傘を持たずに登校しているのは僕の他に少なからず数名はいただろう、

足早に駅に向かう事にした僕は、頭にバックを乗せて学校を後にした。

駅の改札口に着き駅員に定期を見せホームに向かう途中、携帯電話に1件メールが届いた。

「こんにちは梓です。昨日の合コン楽しかったね。カラオケ一緒に行けなくて残念。和夫君にメルアド教えてもらったので送りました。返信待つてまゝす。」

「・・・・・・・・。」

僕はメールを確認した後送り返すべきか迷ったがとりあえずそのままポケットに携帯を戻す事にした。

家に帰ってから返信すればいい・・・そう思う事にした。

家の近くのコンビニに寄ったあと部屋に戻った僕は、昨日乾燥さ

せておいたフィルムに目を透していた。

明日は学校は休みだ思いつき暗室にこもる事ができる。

僕は引き伸ばしと印画紙に焼き込みの作業に入ろうとしていた。

材料と薬品の準備に取り掛かろうと思った時に携帯が鳴った。

僕は携帯のディスプレイに表示されている番号を確認する。

知らない番号だ。

「しまった。」メールの返信をしていなくて既に2時間近く経っていた。

すっかり写真に夢中になっていて忘れていたのだ。

「もしもし。」

「あ！雄太君ですか？」

「うん。」

「梓です。分かります？」

「うん。分かります。」

電話越しから雨と車の走っている音が微かに聞こえてくる、彼女は外にいるようだ。

「和夫君に連絡先を勝手に聞いちゃったから怒ってるのかと思って・
・・」

「いえ。怒ってなんかいないよ。」

「本当に？」

「うん。」

まさか現像に夢中で忘れてましたとは言えない。

「よかった。」彼女は少しホッとしたようだ。

「雄太君は今何してるの？」

「え？いま・・・写真を現像しようかと。」

「写真？」

「うん。写真だよ、少し前に撮りに行った時の景色の写真を現像しようと思って」

「へー見てみたいな？」

「そうだね。機会があれば。」

「あ！ごめんね。友達と約束してて来たみたいだから。また、連絡
していい？」

「うん。」

そして、僕は電話を切ったあとまさか電話が掛かってくると思わなかったので少し驚いていた。

そして暫く経ってから写真の現像に取り掛かる事にした。

5

あれから数日ほど過ぎた。

完全に梅雨の時期を迎えここ何日か雨が降り続けている。

学校の校庭の花壇にはあじさいの花が植えてあり綺麗な花を咲かせていて雨の雫がキラキラと光っている。

午前フットテクニクの授業が終わり午後はフリーになった僕と和夫は学校の近くにある喫茶店カスケードで食事をすることにした。

ここの喫茶店は、僕ら学生が昼食に好く訪れる場所だ。

学校から近いのと、値段が安くボリウムもあり漫画や雑誌もたくさん棚に並んでいていわゆる溜まり場になっていた。

カレーライスを注文した僕は読み途中だった、漫画の本を手に取り読み始める。

和夫はナポリタンを注文してから携帯電話で誰かとメールをしているようだ。

暫くして和夫が話しかけてきた。

「雄太。梓と連絡取り合ってるの？」

「ん？いや。一度メールと電話はきたけどその後はないけど」

「ふん。そうか」

「何で？」

「別に深い意味はないよ。ただどうなのかなと・・・」

「どうって？別に何もないんじゃない。」

僕の返事が可笑しかったのか、和夫はおまえなうて感じで少し苦笑いをしていた。

注文したカレーライスとナポリタンが僕達のテーブルにきてそれを食べ終わり、

僕はコンビニのバイトがあるのでここで和夫と別れる事にした。

帰り道傘を差しながらコンビニに向かう途中カメラ屋により足りなくなったフィルムと漂白液これらの材料を買い終わり、コンビニへと向かう。

コンビニのバイトは出勤する時間はまばらで、授業が早く終わった時にはなるべく早い時間に入るようにしている。

終わる時間は10時と決っているので、長く働ける時にはそのようにしているのだ。

元々アルバイトも人数が足りていないのでオーナーもこころよくOKしてくれた。

バイトが終わり家に帰ってきた僕は、コンビニで買った廃棄の弁当を食べながらテレビを見ていて、

ふと携帯の方に目をやると着信があったらしくランプが点滅しているのに気付いた。

携帯を確認すると、梓からの着信だった。

時間を確認すると8時くらいに連絡をくれたらしい・・・

今は既に11時近くになっているので、僕はメールを送る事にした。

「今日はバイトで終わったのが10時だったので気付かなくてごめんね。また、メールします。」

送信・・・

その後暫く待ってみたが返信がないので寝る事にした。

次の日、学校の帰りに梓から電話がきた。

「もしもし。雄太君ですか。」

「うん。昨日は連絡くれたのにごめん。」

「ううん。バイトって知らなかったから電話しちゃってごめんね。」

「雄太君は今何処にいるの？」

「僕は学校の帰り途中だよ。」

「今から予定とかある？」

「別にないけど・・・」

「じゃーこれから会わない？いま友達と一緒に食事する所なの。」

「え？いいけど・・・友達と一緒になのがいいの？」

「うん。いま雄太君誘ってみようって話してたところなの。」

梓に誘われて僕は2人のいるお店に向かう事にした。

待ち合わせた店は真っ白な外壁に緑色の扉左の窓の下には花壇があり何種類かの花が植えてあるお洒落なイタリアンレストランだった。

僕は扉を開き店内に入る。

「いらっしやいませ。お一人様でよろしいですか？」

近くに居たウェイトエスの女の子が声をかけてきた。

「いえ。待ち合わせをしています。」

答えながら店内を見ると、梓が気付いていたらしく手を振っている。

僕は梓の居る席に向かった。

6

梓のいる席に座った僕は、店内を見渡した。

建物の不陰気とまた違って部屋の中はアンティークな造りになっている。

壁から床は全部が木で作られ壁には大きな古い振り子時計があり天井からはモダンなブリキシェード吊灯が各テーブルに優しく照らしていてテーブルクロスは全席黄色で統一されている。

「凄くお洒落なお店だね？」

「でしょ。ここ私達のお気に入りなの。」

彼女は嬉しそうに少し笑いながら言っつてその後こうつづけた。

「雄太君。私の親友の弥生ちゃん」

僕は紹介された梓の親友の方を見た。

「こんにちは。梓から少しだけ話し聞いてました。石川弥生ついています。」

「こんにちは。成瀬雄太です」

とても丁寧に話す子だったので僕は少し驚いてしまった。

梓とまた違ったハッキリとした顔立ちに何処か幼さが残っている感じで髪型は真っ黒なストレートにスラリとした体型の綺麗な子だった。

僕はそんな彼女に見とれてしまい、胸の辺りの鼓動が少し早くなるのが分かった。

すると梓が僕の顔を覗き込むように言ってきた。

「雄太君もしかしていま弥生ちゃんにみとれてた？」

「へ？べべつにみとれてないよ」

そついいながら僕の鼓動はもっと早くなり顔は赤面しているに違いは無い。

「本当かな？」と言いながら少しからかったように笑っている。

「違うよ。」

僕はこう言うのが精一杯だったけど、何とか平常心を取り戻そうとがんばっていた。

3人で暫く話をした後メニューを取り注文をする事にした。

僕は2人の勧めで、マルゲリータピッツアを注文した。

ここのピッツアはトマトソースとモッツアレラチーズが美味しいらしくおすすめだと言っていた。

梓はシチリア（トラパニ）風アーモンドトマトソースのパスタで弥生はナポリ名物 アサリのパスタを注文した。

そして注文した料理が来るまで僕達は会話を楽しんだ。

会話の途中で梓がこんな事を言っていた。

もう直ぐ夏休みだ、和夫からの提案で休みの間に伊豆に泊まりで遊びに行こうという計画だった。

昨日和夫からメールが届いたらしい。

「雄太君も行くよね？」と梓に聞かれたので、僕は少し悩んでいると、弥生にみんなで行った方が楽しいよと言ってきたので僕は行く事に決めた。

その後梓が「私が誘った時は悩んだのに凄い違いね」と少し不機嫌そうに言っていた。

注文した料理を食べ終えた僕達は精算をして店を出て帰る事にした。

帰りの方角が弥生と途中まで一緒ということもあって梓と別れた

あと二人で話しながら帰る事になった。

梓も一般的に言ってかなり可愛いのだが、弥生も引けをとらないぐらいにというより更に可愛い女性だ。

一緒に歩いている間に何人かの男は彼女をめで追っている。その隣に僕・・・周りの人達はどう思うのだろう。

僕だったら、あんな綺麗な子にあれなんて思ってしまうかもしれない・・・

しかし、弥生はそんな事も気づかずに時々子供に戻ったように無邪気に笑っている。

暫く歩いてからお互い別の方角になり、

「じゃあここで。また会おうね。」と言って弥生は別の方角へと歩きだした。

「うん。また。」と言ってしまった後、僕は暫く悩んでから、弥生の方へと走っていった。

7

弥生は少し離れた場所に歩いていた為、すぐに追いつく事ができた。

「どうしたの？」少し驚いた顔をして僕を見る。

「ハアハアごめん。驚かしちゃった？」少し走っただけなのに思っ

たよりも息があがっている。

「うん。突然走ってくるから。」

「そうだねビックリするよね。」

僕は一度深呼吸をしてから呼吸を整えた。

「実は、メルアドでいいから教えて貰いたくて。駄目だね・・・？」

弥生は少しだけ迷ったような素振りを見せた後に、

「うん。いいよ。」と言ってメルアドと番号まで教えてくれた。

「ありがとう！」僕がとても嬉しくなり喜んでいる。

それを見ながら弥生はくすくすと笑っていた。

弥生と別れてから僕は自分の行動力に凄く驚いていた。

今までの僕にはあり得ない事だからだ。

自分から連絡先を聞いた事もそうだけど、最初に別れた後に弥生の所に行ったという事が一番驚いている。

僕が今まで生きてきたと言ってもそれ程長くはないが、しかし生まれて始めての事なのには変わりはない。

今にも心臓が破裂しそうなぐらい緊張していたわりには普通に聞

けていたと思う。

僕は昂る気持ちを抑えながら家に帰っていった。

家に着いた後も弥生が頭の中から離れないでいる。

携帯の彼女のアドレスをみてはやめみてはやめの連続だ。

時々大きなため息もでる。

僕は自分がおかしくなってしまうような気持ちになった。

高校に通っている頃の事だ、一度だけ付き合った子が居た。

高校2年の2月一つ年下の後輩だったあいみは、学校の下駄箱の前で僕にチョコを渡して好きと言ってきた。

あいみは学校の中ではちょっとした有名人で何処の誰かが人気投票みたいな事をしていてその中で1位か2位を争うような女の子だ。

そんな彼女が告白をしてきた時には冗談で言っているのか、からかっているのかと始めは疑ってしまった。

はっきり言って僕は顔もとわりわけかつこよくもなく身長だって170そこそこの何処にでもいそうなごく普通な高校生だった。

母子家庭だった僕はバイトに明け暮れていて部活だってやってい

た訳でもなくスポーツで目立っていたわけでもない。

そんな僕にあいみは好きだといってきた。

彼女と付き合った後、暫くしてから母親の死や引越しかで色々あった僕は、結局長くは続かずに別れてしまったのだけど、あいみの事は好きだったと思う。

けどその頃の気持ちと今の気持ちは少し違っている様な気がした。

イタリアンレストランで梓に紹介されて、弥生をみた瞬間僕の上にある矢印が一気に彼女の方に向かって指したのが僕自身にも分かってしまった。

たぶん僕は彼女に一目惚れしたんだ・・・

そう気付くにはそれ程時間は掛からなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4511d/>

秋桜の花

2010年10月28日08時44分発行